日本とマレーシアの友好に寄与して59年

MALAYSIA

マレーシア MALAYSIA

創立59年
公益社団法人 日本マレーシア協会

2016
VOL.19
平成28年8月31日発行
(通巻543号)

主な記事

慶祝 マレーシア独立59周年

マレーシアの思い出 ―― P-2
サバ州東海岸地帯と治安状況 ―― P-5
マレーシア親善使節団訪問記 ―― P-10

発行所
公益社団法人 日本マレーシア協会
発行人●小川孝一
編集人●新井卓治

〒102-0093
東京都千代田区平河町1-1-1
TEL.03-3263-0048
FAX.03-3263-0049

JMAギャラリー
LOOK マレーシア 137

ワン・マレーシア

SJKC Kheng Tean
Goh Jia Yin
(小学2年)

ワン・マレーシア(マレーシアはひとつ)に象徴される多民族の共生は、マレーシアの最大の課題のひとつとなっていますが、そのような社会環境に暮らす子供たちにとっては、すでにあたりまえのことなのかもしれません。そのようなことを感じさせられる作品です。

表紙の絵に関するお問い合わせは・・・
NPO法人メイあさかセンター
(Tel.048-468-6972)

寄稿

マレーシアの思い出

―駐在員として見たマレーシア―

西田 重信
公益社団法人日本マレーシア協会監事
元三菱商事㈱マレーシア総代表

近年は国内でも海外でも社会の変化が早く、これまでそれが当たり前だと思っていたことが、ある時からすっかり変わってしまうということも珍しくありません。

それは日本とマレーシアの関係においてもあり得ることで、現状だけを見るのではなく、これからを考えるためには、常にこれまでの関係を振り返り、把握しておくことが大切ではないかと思います。

本号では、かつて三菱商事マレーシアの総代表として、二〇世紀の終わりから今世紀の初めまで、マレーシアに駐在され、日本人会会長などもお務めになられた西田重信本協会監事より、マレーシア駐在時代の印象深い出来事の一部をご寄稿頂きました。

興味深い思い出話だけでなく、示唆に富んだエピソードもご紹介頂いていますので、お楽しみください。

◆

にしだ しげのぶ
昭和四七年三菱商事（株）に入社。産業燃料部長、マレーシア総代表・クアラルンプール支店長、三菱商事石油（株）社長などを歴任。平成二五年度より本協会監事。

初めての海外出張地へ赴任

一九九七年七月、米国のヘッジファンドなどの機関投資家による通貨のカラ売りによりタイを中心に始まった通貨の下落は瞬く内に韓国、インドネシアなどの東アジア諸国に広がり、いわゆる「アジア通貨危機」が勃発しました。

この時私は、商事会社で石油製品を国内外へと販売する部の部長をしており、それ以降タイや韓国等に於ける販売代金の確保・回収などに奔走を余儀なくされました。

これら与信管理の業務がやっとひと段落ついた一年後の一九九八年秋、上司に呼ばれ、年内にクアラルンプールに支店長（後のマレーシア総代表）として赴任するようにとの辞令でした。

実はマレーシアは、私が三菱商事に入社して三年目の一九七四年に初めて海外出張をした国でした。その時、東南アジア原油の輸入を担当していた為、ブルネイ、マレーシア、シンガポールを生まれて初めて訪問したのです。もちろん当時は高層ビルなど何も無いまだまだ南国・オリエンタル情緒一杯の新興国でしたが、人々は皆若々しく感じられ、これからの発展を予期させる国でありました。

それ以降も何度も出張していたマレーシアでしたが、九八年の一二月にクアラルンプール空港に着いた時には、思わず「ここは何処なの」と絶句してしまいました。それは、それまでの出張の時に何度も到着し良く知っていたスバン空港ではなく、数か月前の六月末に開港したばかりの、「成田空港の一四倍の面積」を持つKLIA（クアラルンプール国際空港）に降り立ったからでした。

これが二〇〇三年の五月末迄の四年半に亘る私のマレーシア駐在の始まりでした。

クアラルンプールの街並

アジア通貨危機を脱却

上述のアジア通貨危機により、タイ、インドネシア、韓国はIMFの管理下となり大変苦闘をしていましたが、一方マレーシアではあの名宰相の誉れ高い当時のマハティール首相の強力なリーダーシップの下、独自の経済・財政・金融・外資規制政策によりいち早く危機を脱却し、再び力強い成長へと転じたばかりの時でした。

この時、次期首相と目されていたアンワール副首相とマハティール首相との政争が起きる等若干のごたごたは有りました。しかし、隣国インドネシアで九八年一月に勃発したジャカルタでの暴動等に端を発した大政変―三二年間もの長きに亘って大統領の座にあったスハルト大統領の五月失脚・退陣―等に比べると、まさしく平和裡、合理的、成功裡に通過危機を脱却したと言えましょう。

新たな首都圏開発

KLIA到着の翌日に出社した会社のKLオフィスは、少し前に完成したばかりでピカピカのペトロナス・ツインタワーのタワー・ツーにありました。このペトロナス・ツインタワーは高さが四五二メートルあり、シカゴのシアーズ・タワー（四四三メートル）を抜き世界一の高層ビルでした。その後、世界一の座は私が帰国した後の二〇〇三年一〇月に完成した台湾国際金融センター（五〇八メートル）に、次に二〇〇九年に完成したドバイのブルジュ・ハリファ

（八二八メートル）に抜かれましたが、「ツインタワー」としては依然世界一の高さを誇っています。

実はこのＫＬＩＡやツインタワーは単なる新空港、新超高層ビルではありません。

これらは、「ワワサン２０２０（＝二〇二〇年に先進国入りをする）」というマハティール首相が掲げた壮大な国家目標の一環として建設されたものです。

即ち、大前研一氏の提言に基づき、クアラルンプールの新しい首都圏として「マルティメデア・スーパーコリドー（ＭＳＣ）」を創設し、その北の拠点をツインタワー、南の拠点をＫＬＩＡとし、その間の東西一五キロメートル、南北五〇キロメートルのエリアをＩＣＴ産業の集積地として育成する。その為に、従来ＫＬ（クアラルンプール）旧市街に有った首相官邸や各省庁を移転させプトラジャヤという新行政都市と、ＭＳＣ推進の中核都市サイバージャヤをＭＳＣのど真ん中に新たに建設すると言うものでした。（因みに「東西一五キロメートル、南北五〇キロメートル」と言うのは何とシンガポールと同じ面積なのです。）

（ご参考までに、新空港ＫＬＩＡは故・黒川紀章氏の設計。又、ペトロナス・ツインタワーのタワー・ワンはハザマを中心とする日本企業のコンソーシアムが、タワー・ツーは韓国のサムソンが建設しました。タワー・ワンはマレーシア国営石油会社であるペトロナスの本社として使用され、タワー・ツーはテナントビルとして供されました。三菱商事は建設した日本コンソーシアムの一員だった為、家賃は若干高額でしたが日本勢として初めて入居をしたのでした。）

クアラルンプール国際空港

ツインタワーが映画の舞台に

赴任翌年の一九九九年、ショーン・コネリー、キャサリン・ゼタ・ジョーンズ主演の映画「エントラップメント」が封切りされました。この映画は、若い方には何の事か判らないでしょうが、，九九年の世界的大問題とされたＹ２Ｋ問題（二〇〇〇年問題＝二〇〇〇年一月一日になったら、従来西暦年号を二桁で管理しているコンピュータが二〇〇〇年を一九〇〇年と誤認し処理が出来なくなり大混乱が生じる）をモチーフにし、その舞台として登場したのが当時世界一の高さを誇ったこのツインタワーでした。（時のマハティール首相はこの映画を観て、「せっかく撮影に協力したにもかかわらず、あたかも『後進国マレーシアには大きな貧富の差が有る』と意図的に誇張する典型的なハリウッド的固定観念が看て取れる」と極めてご不満でしたが。）

ペトロナス・ツインタワー

サラワク州での体験

この後、業務上マレーシアの一三州、つまり半島マレーシアでは北のタイ国境から南はシンガポール迄、東マレーシアではサバ、サラワクの両州と国内全州を回りましたが、その間思いもよらぬ様々な体験をする事が出来ました。

中でも業務（液化天然ガス＝ＬＮＧ事業）の関係で度々訪れたサラワク州では、当日本マレーシア協会が推進し、三菱商事が協賛する熱帯雨林再生事業の視察に訪れた際、ボルネオ原住民（イバン族）の住まいであるロング・ハウス（高床式で一つ同じ屋根の下、ベランダ付きの区分けされた住居に何十と言う家族が住んでいる）に招待されました。

日本人が見学に来たと言う事で、多くの家族がベランダに出てきて歓待をしてくれましたが、何と各家庭で作ったツアー（Tuak）と言うパームヤシから作った濁酒を持参。

この「ツアー」、口当たりは甘いが度数が相当強いので危険だと前もって聞いていましたので、礼儀として一～二杯飲むだけに留めようと思っていたのですが、「隣の家の酒を飲んで自分の家の酒は飲めないのか」とばかりに次から次へと勧められ、止むにやまれず杯を重ねました。その結果・・・、昼間から飲んだツアは本当に良く効きました。

私にとって滅多にない「千鳥足」で、這這の態でやっと車に乗った事を覚えています。

サラワク州の首都クチン

ヘリコプターでヒヤリ

又、ボルネオ島の北にあるサバ州を訪れた時の事。後進地域であるサバ州北部の開発計画提案を依頼され、州全域を視察する為にヘリコプターをチャーターし、州都であるコタキナバルからボルネオ島北端のクダまで飛んだ時の事です。

私はパイロットの左隣のいわゆる副操縦士席に座り、同行の社員数名は後部座席の前後に着席。空港を飛び立ち、コタキナバルの都市部を過ぎ、一面植林したパーム畑に差し掛かった時です、けたたましい警報音と共にオレンジ色の警報ランプが燈りました。

パイロットはと横を見ると、上を見上げてローターが回転しているのを確認すると、やおら頭から地面に向かって急降下を開始。ヘッドフォンを付けていた私が「大丈夫か？」と問うと、「ドント、ウォーリー」と言いながらも、一番近くに有った学校を見つけ出してそこの校庭に不時着。結局原因は表示計器の故障だけで操縦・飛行装置そのものには問題がなかったのですが、ローターがちゃんと回転しているのを確認したパイロットの冷静沈着な緊急操作で無事不時着したのでした。

パイロットの隣に座った私は、最初は少し驚いたものの、パイロットとは会話も出来、又ヘリコプターの前面ガラスを通してどの様な状況なのかを視認する事が出来ていましたので、何の心配も恐怖心も全くありませんでした。しかし、後部座席に

向かい合って座っていた社員の内、特に進行方向に背を向けて座っていた部下の驚愕たるや凄いものだった様です。

ヘッドフォンを付けていないのですから、何が起こったか一切分からないまま、突然ジェットコースターの様に地上に向けて背中から急降下、と言うより急「落下」。全く生きた心地がしなかった様です。その後、代替機が来て当初の目的地に向けて飛行を再開しようとした時、「私はもう勘弁して下さい。ここから車で帰らせて下さい。ヘリはもう嫌です」と泣きつく「後ろ向きに座っていた部下」を何とか説得して、やっと飛び立つ事が出来ました。

◆

教訓―【ヘリコプターに乗る時は前の座席か、少なくとも進行方向へ向かう座席に座る事！】

◆

この他、面白い・貴重な体験は沢山ありましたが、次は当協会にも少し関係する話を三題。

塩川大臣が来訪

当日本マレーシア協会の前会長であり「塩爺」の愛称で多くの人から慕われた故・塩川正十郎代議士。小泉内閣で財務大臣を務められていた二〇〇三年一月に来馬されましたが、その時ペトロナス・ツインタワーの見学を希望されました。当時は一般への見学開放をしておらず、タワーは入居企業関係者以外立ち入りが出来ませんでした。

日本大使館からのご依頼もあり、大家であるペトロナスに協力を要請、KL市内を一望できる最上階の八六階（八八階建てですが、八七・八八階は機械室）や、二つのタワーを結ぶスカイブリッジ等をご案内し、会食をご一緒させて頂きました。

その時、「失われた一〇年」脱却に苦労されていた塩川大臣が「先日、某大手メーカー企業から本年数千億円規模の設備投資をすると聞いて朗報だと喜んだのも束の間、良く聞くとその設備投資は日本国内でではなく海外での設備投資の話と判りとても落胆した。産業空洞化の現実を目の当たりにした」と嘆かれたのを今でも思いだします。

マハティール首相と会談する塩川財務大臣

日本は反面教師

二〇〇二年八月、マハティール首相が提唱された「ルックイースト政策」二〇周年記念パーティが首相ご臨席のもとKL市内で開催されました。

その時日本政府代表として参列されたのが、二〇一二年より外務大臣をされ、まさしく世界中を東奔西走されている岸田文雄大臣その人。当時は文部科学副大臣としてのご参列でありました。私はその時KL日本人会会長を務めていた為、同じテーブルで横に座らせて頂きました。

式の後半、質疑応答の場面が有ったのですが、失われた一〇年を念頭に「ルックイースト政策の先生である日本は昨今、政治・経済・社会の各方面に於いて必ずしも良き先生となっていないのではないか」との質問が有りました。これに答えてマハティール首相曰く「一・イーストと言うのは日本だけでなく今や韓国等も含みます。二・日本はおっしゃるような側面もあるがまだまだ学ぶべき事が有ります。（更に加えて）三・『先生』と言う概念には『反面教師』と言う概念もありますよ」と。

アジア通貨危機から脱した韓国の急成長ぶりが実感させられた事と、『反面教師』との表現に思わずドキッとさせられた事を思い出します。

沖縄で経済会議

二〇〇〇年七月に沖縄で、第二六回主要国首脳会議（いわゆる沖縄サミット）が開催されましたが、それに先立つ一九九九年に、それまでマレーシア駐箚日本大使であられた野村一成大使（その後、駐ロシア大使、東宮大夫を歴任）が、サミットをサポートする沖縄担当大使として転任されました。

そこで、沖縄での国際会議開催の実績を重ねる為だろうと拝察しましたが、毎年日本とマレーシアで交互に開催している「日本マレーシア経済協議会（JAMECA・MAJECA）」の合同会議を沖縄で開催しないかとのお誘いがあり、これを受け第二二合同会議が二〇〇〇年四月にサミット会議場である万国津梁館に隣接するブセナテラスで開催されました。

当時JACTIM（マレーシア日本人商工会議所）で貿易投資委員長を務めていた私もマレーシアに於ける日系企業の現状をレポートする為にこの会議に参加を致しました。

この会議にはマレーシアからは当時のラフィダ通商産業大臣の他、政財界の要人が参加し、極めて意義深い会議となりました。

面白い事が起こったのは、その会議終了後の食事の時でした。

東南アジアとの絆を実感

会議場であるブセナテラスのレストランでメニューを見ていたマレーシアの要人の一人が、「こんな料理が沖縄に有る！」と大声で皆を呼んだのです。

その料理とは、ゴーヤー・チャンプルーに代表される“チャンプルー”でした。

沖縄方言でチャンプルーとは「混ぜこぜにした」・「混ぜる」と言う意味ですが、実はマレーシア語にも「チャンプール」と言う言葉が有り、これが全く同じ意味の「混ぜる」と言う意味なのです。マレーシアには有名な「ナシ・チャンプール」と言う料理が有りますが、それはまさしく「ナシ（＝ご飯）、チャンプール（＝混ぜる）」で「混ぜご飯」。

尚、長崎で有名な「チャンポン」。これも同じ語源かも知れません。

この沖縄とマレーシアの共通言語の持つ意味とは。古くは、遣唐使、倭寇、ご朱印船、タイでの山田長政、ルソン助左衛門などの例を上げるまでもなく、日本は大昔より東南アジアの各国・地域とは交易が有り、それと同時に多くの文化の交流があった事を裏付けています。

現在中国の横やりで問題が生じている南シナ海、東シナ海ですが、日本と東南アジアは、この南シナ海・東シナ海を通した「一衣帯水」の隣国同士である事をまさに実感した出来事でした。

■